

## 新刊ライブラリー

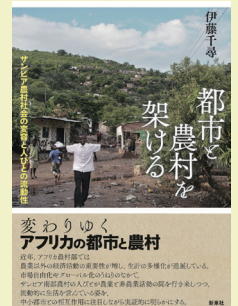
伊藤千尋 著

『都市と農村を架ける  
—ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性—』

新泉社、2015 年、291 ページ、4200 円＋税

原将也

京都大学、日本学術振興会



「都市と農村のバランス」は、どこの国にも存在する普遍的な課題である(本書 1 ページ)。著者が述べているように、都市への人口や経済の集中、農村の過疎化、地方分権化という課題はどこの国ももっている。本書の著者は、大学院生になってはじめてアフリカを訪れ、調査地となったザンビアの農村において不安定な農業生産の現実を知るなかで、まさに都市と農村を架けながら生活する「農民」に出会った。著者は農村で調査していくうちに、農村と都市のあいだを移動し、さまざまな生計活動に従事する村びとたちの柔軟さを知り、彼らを「農民」と呼ぶことをためらうようになった。

本書が対象としているザンビアの都市人口増加率年平均 4.2% であり、サブサハラ・アフリカ諸国のなかでも都市化率が高い国のひとつである。それは植民地時代に、南部アフリカ地域における労働力の供給地となったことや国内で鉱山開発が進められたことに起因しており、現在に至るまで出稼ぎを中心とした労働移動がさかんである。本書はそんな農業と非農業活動のあいだ、そして農村と都市のあいだを行き来する「農民」の生計活動を実証的に分析し、複雑化する農村と都市の相互作用を描きだしている。

著者は農村において多様化する非農業活動のなかでも、村内における畑の耕作や家の修理などのピースワーク (piece work) という短期の賃金労働が、世帯にとって重要な現金稼得の手段となっていることを指摘する。そのピースワークを生みだしているのが、農村ビ

ジネスをおこなう富裕層の農民であるという。農村ビジネスとは、村内でおこなわれている商店やレストラン経営のような商業、サービス業のことを指す。農村ビジネスの事業主の多くは高学歴であり、都市の経済悪化によって職探しに失敗し、都市から「追い返された」経験をもつ。本書では、彼らが農村に戻って商店やレストランを経営し、興隆していく様子がいきいきと描かれている。彼らは近年では、近郊の中小都市にも活動の場を広げ、よりよい生活のために新たなビジネスチャンスをつかもうとしている。

本書ではこのような農民の生計活動が、中小都市の存在によって成立していると指摘されている。著者は農民の出稼ぎの実態を分析し、現在の農民の生活範囲が農村にとどまらず、中小都市へも広がっていることを示している。調査村では降水量の年変動が激しく、農民たちは干ばつや食料不足が起こったときに素早く対処するため、出稼ぎ先として中小都市を好むようになった。農村から安く、すぐに移動することができる近郊の中小都市への出稼ぎは、困窮時においても参入しやすい。著者は数日や数週間という、ごく短期間の中小都市への出稼ぎが、村内におけるピースワークの代替となっている可能性を述べている。著者は農民たちの個々の生計活動を丁寧に検討していくなかで、彼らが中小都市を生活範囲とみなし、農村と中小都市を連続する空間として捉えていることを指摘している。

中小都市が農村を含めた地域社会の変容を担うカギ

となっているという著者の指摘は、現在のアフリカにおける都市と農村の関係性を捉えるうえで重要である。これまでザンビアにおいて、都市と農村は二項対立的に論じられてきた。しかし著者は、都市と農村が農村ビジネスや出稼ぎといった多様な関わり方をもつことを指摘し、両者の関係性を、個人や世帯が架ける経済活動のネットワークとして捉える重要性を説いている。最後に著者は、本書で示している農村や中小都市にお

ける変容が、本書の地域固有の事例とは言い切れないと感じていると述べている。その背景には、アフリカ各地で進展するグローバル化にともなう社会・経済の急速な変化がある。本書はザンビアのみならず、アフリカに携わる人間が少なからず感じている急速に変容するアフリカの断面を的確に捉えている。

(はら まさや)

浜本満 著

## 『信念の呪縛』

—ケニア海岸地方ドゥルマ社会の妖術の民族誌—

九州大学出版会、2014 年、544 ページ、8800 円＋税



橋本栄莉

九州大学、日本学術振興会

本書は、ケニア海岸地方に位置するドゥルマ社会の妖術信仰を事例に、人間集団をある信念へと呪縛し続けるシステムのあり方を明らかにした民族誌である。著者は30年以上にわたりドゥルマ社会でフィールドワークを続け、同社会の変化を目の当たりにしてきた。妖術とは、人に知られることなく他人に危害を及ぼす特別な手段のことである。ドゥルマの妖術使いは、実に様々な手段を用いて人々に不幸や病気、災難をもたらしている。

日本に暮らす多くの人は、アフリカの妖術と聞けば、自分たちとは全く縁のない「非合理的」思考に満ちた世界を想像するかもしれない。しかし、本書はこうしたアフリカの妖術に対するイメージを一掃する。貨幣経済、近代教育、開発、キリスト教など新しい概念や実践が流入するアフリカで、いかにして妖術信仰は展開しているのだろうか。

1990年代、アフリカ諸社会の妖術信仰にかんする議論が人類学者の間で再活性化した。というのも、社会の近代化とともに消え去っていくであろうと考えられてきた妖術信仰や実践が、新たなかたちで人々の生を縛り付けるようになったからである。序論では、この

ような「妖術の近代性」にかんする議論の批判的検討と、本書を貫く問題意識と視座が提示される。

第1部では、ドゥルマの人々が妖術に関して持っている一般的・専門的知識やイメージ、妖術使いや妖術が引き起こす諸問題が記述され、人々がどのように妖術の観念世界を構成しているのかが示される。続く第2部では、妖術に起因するとされた災厄に対する人々の対処法など、妖術をめぐる人々の諸実践が明らかにされる。

第3部では、妖術を経験したという3人のエピソードが取り上げられる。ここでは妖術の物語に内在するさまざまな仕掛けによって、妖術に対して懐疑的であった人々もが徐々に妖術の物語にとらわれてゆくさまが描かれる。そしてこの妖術の物語が、どのように妖術の現実的可能性を強化しているのかが明らかにされる。

第4部と第5部では、1980年代前後からケニアで活発化した地域ぐるみの抗妖術運動の特徴とその歴史的な展開が記述される。抗妖術運動とは、高名な施術師がリーダーとなり、地域住民が妖術使いを狩り出し一掃しようとするものである。ここでは周期的に反復す

る抗妖術運動が 20 世紀前半の植民地行政の産物であったことと、地域の「開発」をめぐる人々の思惑の中で、妖術信仰が新たなリアリティの次元を獲得していた過程が明らかにされる。

上記の議論を通じて、結論部では妖術信仰とはアフリカの古めかしい伝統などでは決してないことと、そして妖術信仰という信念と実践のさまざまなところにそれを真理化し、現実化する仕組みが含まれていたことが説得的に示される。ドゥルマ社会の妖術信仰は、西洋社会との接触とケニア地域行政に支えられながら展開してきた、「時代にチューンを合わせつつ生成してきた信仰と実践のシステム」(p. 502) なのである。

大変親しみやすい文体で記述された本書は、人類学やアフリカの諸事情に通じていない読者にも十分楽しめる専門書である。著者が調査の中で直面した思いがけない出来事、妖術実践に対する著者個人の素朴な意

見やツッコミ(?)など、思わず吹き出してしてしまう場面が満載である。一方で、人類学のみならず哲学や心理学などの分野で長年議論されてきた信念をめぐる問題も十分に引き上げられ、汎用性の高い議論が各章で展開されている。

本書を読み終えると、こうした信念の問題は、必ずしもドゥルマやアフリカ社会にのみ当てはまるのではなく、世界各地で、あるいは私たちの生のすぐ側で自分たちを縛り付けているものであることに気付かされる。本書は、アフリカ-西洋-日本という文化的コンテクストを超えて生起する複数の信念の様態と、それらが交わる場の臨場感を読者に与えてくれる重厚な民族誌である。本書で提出された結論が、著者の次の課題である「信念の生態学」へとどのようにつながっていくのかが楽しみである。

(はしもと えり)

大門碧 著

『ショー・パフォーマンスが立ち上がる  
—現代アフリカの若者たちがむすぶ社会関係』  
春風社、2015 年、352 ページ、4500 円＋税

中澤芽衣

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



ウガンダの首都カンパラでは、夜になるとレストランやバーで、若者たちがステージ上で音楽にあわせてダンスや芝居を繰り広げている。人びとは、このショー・パフォーマンスをカリオキと呼び、パフォーマーも、多くの観衆もカンパラの夜を楽しんでいる。2014 年 7 月、初めて評者はカリオキに足を運び、カンパラの夜を楽しんだ。大音量の音楽にあわせてエネルギーに踊るパフォーマーをみているうちに、評者自身は自然と音楽にあわせて体を動かし、カリオキの魅力に引き込まれていた。このカリオキは日本語のカラオケに由来すると考えられており、遠く離れたウガンダにも日本の影響をうかがうことができるが、日本のカラオケとは異なるものである。

本書は、このカリオキとよばれるショー・パフォーマンスを対象に、1) カリオキのパフォーマーと観衆との関係、2) パフォーマーの所属するグループに対する集団意識、3) グループ内のパフォーマー同士にみられるつながりの 3 点に着目して、若者たちがつくりだす社会関係を描き出している。

第 1 章では、音楽にあわせて口パクで歌い、身体を動かす「マイム」、個人もしくは複数人で踊る「ダンス」、歌詞の内容にあわせて、喜劇的な動きをつけながら芝居を演じる「コメディ」といったパフォーマンスの内容が説明される。カリオキはこれらを組み合わせで構成されている。カリオキのステージでは、客は流れている音楽にあわせて踊り、気に入ったパフォーマー

ーにチップを渡すなど、パフォーマーと客の間で交流がみられるのが特徴である。

第2章では、カリオキがカンパラで勃興し、定着した要因として、1990年代以降つく国内政治の安定や経済成長を指摘している。経済成長や新しい技術の導入により、音楽をデジタルで自由にやりとりできる環境が整い、人びとは音楽をより身近に楽しめるようになった。西洋音楽やダンスに興味をもつ若者たちがレストランやバーでビジネスとしてパフォーマンスを始めたのをきっかけに、パフォーマンスをする人びとのグループが次々と生まれたのだという。

第3章では、カリオキのグループに着目し、レストランやバーのオーナーに雇われるグループ（雇用型）やパフォーマーが自主的に運営するグループ（自主運営型）といったグループの運営方法やパフォーマーの民族や出自、学歴、カリオキに参入した動機、報酬について分析している。グループ内では強い結束力はなく、人びとは報酬に対する不満や人間関係の悪化を理由に他のグループへ容易に移動する。ただし、他のグループに移動したからといって、パフォーマーたちの関係は絶たれることはなく、かれらはゆるいつながりを維持しつづける。

第4章では、カリオキのステージをめぐるグループ内の人間関係に着目し、パフォーマーたちによる演目構成の決定プロセスを分析している。パフォーマーたちは客を飽きさせないよう考慮し、カリオキで使用する歌や歌の順番などの演目構成を決定している。パフォーマーが踊る予定だった歌をDJが準備していなかったなどの理由で、当日に演目構成を急遽、変化することもあるが、パフォーマーたちは当日の演目変更を容認し、臨機応変に対応している。

第5章では、筆者自身がパフォーマーとしてカリオキに参加し、ダンスの練習場や楽屋、そして本番のステージ上でみられた、ダンスのふりつけやパフォーマンスで使う衣装といったモノを通してのパフォーマー同士のかかわりを記述している。カリオキのショーでは、踊る予定だった歌が流れないことや歌の順番が変わるといった突発的なハプニングが日常的に起こりうる。そのような場合でも、パフォーマーたちが互いを巻き込みながら、そのハプニングに対応する姿が生き

生きと描き出されている。

第6章では、パフォーマンスで使う歌を通じてのパフォーマー同士のかかわりについて論じている。パフォーマーは欲しい歌をデジタルで自由に入手できるが、すでにグループ内で別のパフォーマーがカリオキで同じ歌を使用していた場合、その歌を優先的に使用する権利は最初に歌を使用したパフォーマーに存在する。しかし、パフォーマーたちはその歌を使用するために交渉する余地は残されており、決して独占されることはない。パフォーマーは歌を通して、他のパフォーマーの存在を認識し、同じ歌を使用するために交渉するなどをして、パフォーマー同士がかかわりをもっていた。

終章では、これまでの章をまとめ、カリオキのパフォーマーたちがグループ間を移動し、流動的な関係をもつ一方で、互いを巻き込みながらショー・パフォーマンスを構成するなど、ゆるい紐帯を維持していると、筆者は指摘している。パフォーマーたちは、カリオキを通して共通のアイデンティティを築き上げ、結束を強めるといったことはなく、柔軟な関係のもとで集団を構成している。

著者自身がパフォーマーとしてカリオキに参加し、パフォーマーの日常生活やステージ上、楽屋の様子、パフォーマー同士の会話を臨場感あふれるかたちで、ダイナミックかつ緻密に描き出している。読者はステージに立つ著者の緊張感を共有しながら、パフォーマーと打合せをし、会話をしている感覚にとらわれる。

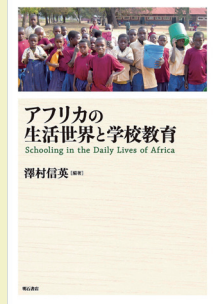
ウガンダでは政治的安定や経済成長、音楽のデジタル化といった社会環境の変化によって、人びとは夜間に外に出歩き、レストランやバーで食事をしながら音楽を楽しむことが可能となった。本書を通じて、読者はこうしたアフリカ都市部における人びとの生活の変化やエンターテインメントの多様化を知ることができる。本書は若者たちがむすぶ社会関係について細部にわたって記述しており、参与観察を行う上で参考になる。アフリカの音楽やダンスに興味がある人に限らず、アフリカの都市で参与観察を考えている人に、ぜひとも手にとってほしい1冊である。

(なかざわ めい)

澤村信英 編

## 『アフリカの生活世界と学校教育』

明石書店、2014 年、274 ページ、4000 円＋税



有井晴香

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

アフリカの教育開発に関する研究では、学校のなかで起こる事象だけが扱われ、地域の人たちにとって学校が実際にどのように捉えられているのか問われずにいることが指摘されてきた。「学校教育」に加えて「生活」という語がタイトルに含まれている本書は、そこに暮らす人びとの視点に立つことに重きを置いており、教育開発研究において見過ごされがちであった問題を問い直すものである。サブサハラ・アフリカの 11 の国がとりあげられており、それぞれの著者が長期間かけて継続的におこなってきたフィールドワークをもとにした論考となっている。また、本書の特徴のひとつには、教育開発を専門とする研究者だけでなく、人類学者による論考（高田明「[ナミビア] オバンランドのクンと教育」、秋山裕之「[ボツワナ] 優等生国家における少数民族と学校教育」）も含まれており、人びとにとって学校教育がどのように語られ、またどのような作用がもたらされたのかに関して厚い記述がなされていることがあげられる。

以下では、序章にくわえ、ナイル・エチオピア学会に関わりの深い北東アフリカの国（南スーダン、エチオピア、ケニア）を取り上げた各章の内容について紹介する。

序章「アフリカの生活世界と学校教育」（澤村信英）では、本書のねらいと構成、各章を通して見出された問い直すべき課題がまとめられている。澤村によると、アフリカにおける教育分野の研究は、援助機関の主導によっておこなわれてきた傾向があり、教育部門全体の現状分析にその関心は集中しているという。そのため、子どもが置かれている状況や学校内部の実態に関する研究が不足していると指摘する。本書は、アフリカ教育開発研究における新たな展開として位置づけら

れ、アフリカ各国の子ども、保護者、地域住民、教師といった学校に関わるさまざまな人々を対象として、それぞれの研究者の関心にもとづいて当該社会の文脈のなかで学校を捉えるところに重点をおいている。また、編者がこれまでケニアでおこなってきたフィールド調査の事例をまじえながら、継続的な調査の重要性を指摘している。継続的に調査をおこなっていくことは、さまざまな教育的な事象をより公正に解釈するために必要であり、変化し続けていく社会のなかで、人びとにとって学校教育がどのような役割を果たしているのかを問いなおすことにつながっていくと述べている。

第 1 章「[南スーダン] 大きな社会変動の中の学校教育」（中村由輝）では、アフリカ大陸 54 番目の独立国として 2011 年に誕生した南スーダン共和国の教育史について記述している。南スーダンは、1956 年のスーダン独立の時期から紛争の中心地であり、独立後もいまだ不安定な情勢が続いている。このような状況が続いた背景はスーダン独立後の内戦だけではなく、エジプト、イギリスによる植民地時代に遡るといい、1820 年代からのスーダンにおける政治史とともに教育状況の変遷を追っている。独立後、教育制度の整備は重要課題として位置づけられていたものの、いまでも人びとに教育機会を保障するにいたらず、混乱した状態が続いているという。近隣国や遠く離れた列強に翻弄されながら 100 年以上ものあいだ南スーダンの人びとは教育の機会が奪われてきた。国内に人材が限られていることに加え、それぞれ異なった教育背景をもった人びとが教育システム作りに関して共通の認識をもてないまま、すべての教育課題に対処していかなければならない。こうした点に南スーダンの教育が抱える困難が

ある。不安定な情勢によって現地調査が難しく、利用できる資料が限られているなかで、中村は、南スーダンの人びとが自国の教育状況について把握し、分析できるように、環境を整えるための時間と支援が必要であると指摘している。

第5章「[エチオピア] 住民による学校支援の背景を探る」(山田肖子)では、学校数、就学者数が著しく増加している昨今のエチオピア農村において、住民が学校や教育の問題にどのように関わっているのかに焦点をあてている。オロミア州の14の小学校を対象におこなった参加型ワークショップを通して、住民による学校運営への関与の度合いを決める要因を分析している。その結果、近年の政府による学校教育の推進政策によって住民の教育への関心が高められただけではなく、もともと住民主体で教育について議論する基盤があったことを指摘している。また、エチオピアのみならず、アフリカの多くの地域において行政の分権化の考えのもと学校運営へのコミュニティ参加を促す制度作りがすすめられてきたが、制度上で掲げられているコミュニティという語が指す内容は曖昧なものであり、実際には学校を基点としたコミュニティは多層的かつ多面的なものであるという。そのような、ひとくくりにすることができない「コミュニティ」がいかに学校教育へ関与しているのかを知る上で、そのリーダーの存在に目を向けることが重要であると述べている。リ

ーダーシップの存否が学校運営に関わるコミュニティの活動が活発であるかどうかを決定付けていることを明らかにしている。

第6章「[ケニア] スラムに暮らす小学校修了者の教育継続」(大場麻代)では、ナイロビのスラム地域のひとつであるキベラに住む、中等学校に進学できなかった初等教育修了者を調査対象として、その理由を世帯背景から検討している。ケニアでは小学校・中等学校の授業料は無償化されているが、授業料以外にも補習授業費など各世帯が負担しなくてはならない費用がある。こうした教育費の負担が学校教育の継続を妨げるおもな要因となっていることを明らかにしている。また、保護者は自らの学歴に関係なく教育に重要性を見出し、学校教育に対して高い関心をもっていることも示されている。

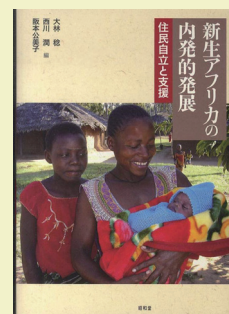
アフリカ各地で次々と学校が建てられ、より多くの人びとの生活のなかに学校教育が浸透しつつある現在、本書で提示されている生活と学校教育を結び付ける研究の視点はますます重要なものになっていくといえるだろう。人びとが学校教育をどのように受け止め、またかれらの生活にどのような変化がうまれているのかを問うためには、編者が述べていたように、継続的な調査・研究が不可欠であり、本書はその第一歩といえる。

(ありい はるか)

## 大林稔・西川潤・阪本公美子 編 『新生アフリカの内発的発展 —住民自立と支援—』

昭和堂、2014年、349ページ、3200円＋税

吉田早悠里  
名古屋大学高等研究院



本書は、1960年のアフリカの年から半世紀を経て、大きな変動期にあるアフリカの内発的発展の問題を検討したものである。現在、10億を超える人口を抱えるアフリカでは、グローバリゼーションに伴う急速な変

化のもとで市場経済化が進むとともに、世界的な資源ブームのさなか、高い成長を示す国が登場した。他方で、人口増加、生態系の悪化、世界市場の動きと直結した紛争、民族対立などの問題が深刻な形で現れてい

る国々もある。本書は、こうした世界的な動きとともに、これに対応してアフリカの内部から生じている変化の動きのダイナミクスを分析することで、今日のアフリカの変化を理解することを目的としている。

本書において、内発的発展は2つの意味で用いられている。第1に、分析の枠組みとしてである。世界経済との接触、海外からの働きかけに対して、地域社会はどのように反応、対応しているのか、とりわけ歴史的、文化的に形成された人々の思考、集団的な反応によってどのような変化が引き起こされ、コントロールされ、地域独自の変化を生み出しているのか、こうしたアフリカの人々の思考、動きを内発的発展とする。第2は、方法論としての内発的発展である。内発的発展論は、社会変化に必ず文化が関わっているとし、社会変化と文化との相関関係を明らかにしようとする、社会動態に関する文化的な分析アプローチとして説明される。本書では、アフリカで進行する変化を、政治的、経済的に分析するだけでなく、さらに文化的、人類学的な分析ツールをも加えて総合的に検討する手法をとっている。

本書は、13人の執筆者による論考が、序説と12の章から構成されている。本章は2部構成になっており、第Ⅰ部は「各国・地域に見る内発的発展——住民自立に根ざす自前の民主主義」と題され、7章が収められている。アフリカ各地で観察される内発的発展の事例を検証し、それがいかに「自前の」民主主義を育み、新生アフリカを動かす動因となっているかを示すことが目的とされている。第Ⅱ部は「内発的発展と外部支援——相克と協働」と題され、5章から構成されている。アフリカにおける発展経験を通じて、内発的発展と外部支援の関係をどう理解するか、また両者の相克、協働の働きが、いかに内発的発展論を豊穰化させ、深化させてきたかが提示されている。第Ⅰ部は、アルジェリア、エチオピア、ニジェール、ザンビア、タンザニアといった国における具体的な事例を通して内発的発展が論じられている。これに対して、第Ⅱ部では一国の事例を掘り深めるというよりは、むしろマクロな視点からアフリカの国々と支援を行うドナーの関係が中心に論じられている。

以下では、第Ⅰ部からはエチオピアに関して取り上

げた第2章「エチオピアの開発と内発的な民主主義の可能性——メレス政権の20年をふりかえる」（西真如）、第3章「内発的発展を支えるコミュニティ種子システム——エチオピアにみるNGOと政府の協働」（西川芳昭）、第Ⅱ部からは内発的発展と外部からの開発援助の関係に関する論考について紹介する。

西は、エチオピアの内発的な民主主義の可能性について検討している。エチオピアでは、1991年から2012年8月までおよそ20年にわたってエチオピアの首相を務めたメレス・ゼナウィが「民主的な開発主義」（democratic developmentalism）と呼んだ政策が進められてきた。2006年頃から年率10%前後の経済成長を遂げるなか、メレスは「民主的な開発主義」の名の下に、公共事業の実施や政府の雇用拡大を推し進めた。西は、メレスが提唱した「民主的な開発主義」は、内発的な民主主義に根ざしたものではなく、民主的な開発政策であるかどうかとも疑わしいとしつつ、この思想はアフリカの開発と民主主義を考えるうえで重要な歴史的意義をもっていると評価する。

西川は、アフリカの農村地域に内在する作物遺伝資源を利用した農村地域の内発的発展の可能性について論じている。具体的には、多国籍企業の種子独占に対抗して、農民、国際NGOが協働して、政府の支持をも得て、コミュニティ・シードバンクを設立し、伝統的な農作物種子の保存と利活用に進み出していることを報告している。西川は、アフリカにおいては、必ずしも内発的とはいいがたい農村開発が主流化していると指摘する。たとえば、輸出志向の農業のひとつとして花卉産業があるが、これらの農場で働く住民は、彼ら自身の食糧生産活動から隔離され、現金収入も乏しい。エチオピアでは、食料安全保障のための収量増加を目指す政策に合わせて種子システムの構築が目指されるとともに、農民自身が作物遺伝資源を自らの地域発展のために直接利用する組織・制度の整備が実施されている。こうした取り組みは、農業生産性の向上と環境保全が両立する可能性を示し、アフリカにおける「農民の権利」「食料主権」を意識した内発的農村開発の実現につながると評する。

第10章「開発援助政策の変遷と限界——OECD開発委員会での議論を通じて」（尾和潤美）では、OECD

の開発援助委員会の援助政策の歴史的変遷、それがアフリカ諸国にもたらした影響、現在のグローバル化のなかで生まれてきている新たな課題について検討している。ドナー国政府、国際市民社会、受け取り国政府、受け取り国地方政府、受け取り地域の市民社会等、さまざまな「開発アクター」の間の履行や利害調整の問題を指摘し、支援者が自己満足に陥るのではなく、絶えず関係諸アクター間の関係を問い直すことで、アフリカ社会の持つ内発性が活かされることにつながると論じる。

第11章「内発的なガバナンス政策——外部主導型からの転換をどう図るか？」(笹岡雄一)では、アフリカのガバナンス政策について論じている。アフリカのガバナンス政策は、外部主導で推進されてきた。これは、植民地政府にはじまり、現在の先進国主導の国際経済体制やドナーの開発援助に至るまで受け継がれている。こうした外部主導のガバナンスの歴史的経緯を検討するとともに、そのアンチ・テーゼとして期待される内部主導のガバナンス政策を推進する主体とその方法、およびその条件を検討している。

第12章「可能環境 (Enabling Environment) アプローチ——内発的發展を尊重する支援とは」(大林稔)では、近年の開発理論・政策で多く用いられるようになった社会開発を可能とするような政策環境と、内発的發展の関係が議論されている。大林は、従来の援助と内発的發展に関する議論を踏まえたうえで、可能環境アプローチに注目する。可能環境アプローチとは、対象に直接的な働きかけを行わず、対象を取り巻く環境の改善をはかることによってその発展を促す援助手法であり、受益者に自己決定権を還元する試みでもある。そ

こで、内発的發展の可能環境づくりに考慮すべき要素として、平和と安全の保障、安定したマクロ経済と市場の発達・公正な分配、適切な農業政策・制度、資源管理権の返還をはじめとした10項目を挙げ、「内発的發展の権利」を尊重した援助のあり方を提言している。なお、現実の援助の現場では、可能環境づくりを掲げていなくとも、政策はもちろん、自治体や市場のあり方、人々の認識にいたるまで、事業の枠を越えた環境に働きかけている真摯な試みは少なくない。これらの努力を可能環境づくりの観点から学び直すことが重要であると結論付ける。

本書は、激しい変化の波のなかにあるアフリカにおいて、内発的發展の主体は、日々の暮らしを生き抜く普通の人々であり、彼らの日々の暮らしの営為のなかに内発的發展があると指摘する。さまざまなレベルでの住民たちの社会発展や内発的發展の動きを明らかにするとともに、そこに外部ドナーがどのように働きかけ、外部援助と内発的發展の運動がどのような条件のときにいかなる帰結を導くのか、アフリカにおける内部的な変動ダイナミズムをミクロとマクロの双方の視点から提示することに成功している。本書の副題にある住民自立と支援は、外部からの介入と内側からの自立という相反する志向性を持つ。1960年代初頭に多くのアフリカ諸国が独立したが、国際社会は「開発援助」という名目の下で依然としてそれらの国の開発政策をコントロールしてきた。こうした過去を踏まえてアフリカの現状を多角的に描くことで、今後、どのようにアフリカと向き合うのかを読者に問いかける良書である。

(よしだ さゆり)

岡野英之 著

『アフリカの内戦と武装勢力  
—シエラレオネにみる人脈ネットワークの生成と変容—』

昭和堂、2015 年、427 ページ、6800 円＋税

村橋 勲

大阪大学大学院人間科学研究科



本書は、シエラレオネ内戦における政府系勢力、カマジョー (Kamajors) / 市民防衛軍 (Civil Defense Force: CDF) の形成、統合、拡大の過程を、パトロン＝クライアント関係に基づく人脈ネットワーク (以下、PC ネットワーク) の生成と変容から明らかにしている。カマジョー / CDF は、シエラレオネ南・東部に居住するメンデ人を主体とする自警組織である。CDF は、反政府組織の革命統一戦線 (Revolutionary United Front: RUF) を上回る数の戦闘員を擁し、内戦中は主要な武装勢力として活躍したが、AFRC 政権期 (後述) における軍事基地ベース・ゼロの活動では、RUF 支持者とみなした市民への掠奪や暴行が横行したため、数人の司令官は国際人道法違反の容疑でシエラレオネ特別裁判所に訴追されている。

本書は、序論、第 1 章から第 11 章、そして終章から構成されている。著者は、カマジョー / CDF を、指揮系統が明確な軍隊としてではなく、リゾーム状に広がる人脈から動員される軍事的な社会ネットワークの集合体と捉え、組織の動態を司令官と戦闘員の PC ネットワークから分析している。第 5 章から第 11 章までは、カマジョー / CDF の各司令官の政治的思惑や権力争争、戦闘員の離合集散が時系列に沿って詳細に描かれている。なお、著者は 2007 年からシエラレオネとリベリアで現地調査を行っており、本書で提示される事例は、元カマジョー / CDF 司令官への聞き取り調査のほか、シエラレオネ真実和解委員会報告書、シエラレオネ特別裁判所の裁判記録などの文書資料に依拠している。

はじめに、第 1 章からシエラレオネの歴史と内戦に至る社会的背景を整理する。西アフリカの小国、シエラレオネは、19 世紀初頭にイギリス植民地となり、解放

奴隷や奪還奴隷<sup>1</sup>の入植により国家の建設が進められた。彼らは、首都フリータウン周辺に定住したが、その外側の内陸部には土着の人々が各首長国にわかれて暮らしていた。植民地政府は、フリータウン周辺の直轄植民地以外の領域を保護領とし、地元の有力者をパラマウント・チーフに任命して間接統治を敷いた。伝統的な首長国は、チーフダム<sup>2</sup>として再編され、支配家系となったパラマウント・チーフは、チーフダムの統治とともに植民地行政官と地域住民との橋渡しを任された。1961 年の独立後、シエラレオネでは、中央政府による集権化が進む一方で、中央から置き去りにされた地方のパラマウント・チーフたちは住民への専制支配を強化した。その結果、シエラレオネは、一握りのビッグマンが、公的な制度を迂回し、私的な社会関係に基づき、富、地位、武器などの資源を分配する新家産制国家の様相を呈した。しかし、資源の分配から排除された学生たちは反発を強め、後に反政府組織 RUF の主体を構成した。1991 年、サイドゥ・モモ軍事政権の下、フォディ・サンコー率いる RUF がリベリア国境付近で武装蜂起し、この事件を発端とした内戦が 2002 年まで続いた。シエラレオネ内戦による犠牲者は、死者 7 万人以上、難民、国内避難民は合わせて約 260 万

1 解放奴隷とは、18 世紀後半、イギリスの奴隷廃止論者によって解放され、アメリカからイギリスに移住した奴隷を指す。また、奪還奴隷とは、19 世紀初頭にイギリスで奴隷貿易禁止法が制定された後、拿捕された奴隷貿易船からフリータウンに連れてこられた奴隷を指す。

2 チーフダム (chiefdom) は、一般に、首長国あるいは首長制社会と翻訳されるが、本書では、シエラレオネの歴史的文脈に即して、植民地統治以前に林立していた各地の小国を首長国、その支配者を首長と記載する一方、植民地統治下で再編された統治体系をチーフダム、その支配者をパラマウント・チーフと記載することから、本稿の記載もそれに従う。

人に上る。

第4章では、カマジョーの社会基盤とカマジョー結社の特徴が述べられる。内戦中に誕生したカマジョーは、メンデ語で狩人を意味するカマジョイ (*kamajoi*) を語源とし、伝統的なメンデ社会の狩人を模倣して作られた。しかし、カマジョーの成員は、徒弟制によって狩猟の専門知識を伝承されるのではなく、結社に加入することで戦闘員として認められるという点で伝統的な狩猟民とは異なる。イニシエーターによる加入儀礼を受けたカマジョーの戦闘員は銃弾を跳ね返す能力を得たと考えられ、戦闘中はその能力を維持するために、護符を身につけ、結社の掟を守ることが求められた。

第5章と第6章は、サイドゥ・モモ政権<sup>3</sup>下での内戦の勃発から国家暫定統治評議会 (National Provisional Ruling Council: NPRC) 政権期<sup>4</sup> (1991年～1995年) にかけて、カマジョーが誕生した背景と経緯を明らかにしている。シエラレオネ政府は、RUF 掃討のため、リベリア人難民<sup>5</sup>と地域住民の双方を組織的に動員し軍事力の強化を図った。RUF は、国軍の攻勢により一度は退却したが、1994年からゲリラ戦を展開し、農村部の集落を次々に襲撃した。これに対し、地域住民は自衛のため各地で自警団を組織するようになった。自警団への動員に際し、呪医やイスラム知識人が加入儀礼を取り入れたことでカマジョー結社が作られた。初期のカマジョーは、チーフダムを基盤としており、戦闘員はパラマウント・チーフを頂点とする PC ネットワークで結ばれていた。

第7章では、NPRC 政権後期から前期カバー政権期 (1995年～1997年5月) におけるカマジョーの動向に注目する。RUF は、カバー文民政権<sup>6</sup>が誕生した後

も、リベリア国民愛国戦線 (National Patriotic Front of Liberia: NPFL)<sup>7</sup>の支援を受け、政権打倒を目指しゲリラ戦を継続した。カバー政権は、RUF 掃討に向け国軍よりもカマジョーを重用し、ボー県のカマジョーの代理チーフ<sup>8</sup>、ヒンガ・ノーマンを国防副大臣に任命した。農村部では、RUF と国軍の双方による暴行と掠奪が横行し、カマジョーは自警組織としてより強い力を発揮することが期待された。この時期、カマジョー結社の加入儀礼はメンデ全域に広まり、イニシエーターを司令官とする部隊も登場した。カマジョーは、チーフダムを越えて統合し、より大きな勢力が形成され、国軍とも衝突するようになった。

第8章と第9章は、軍事革命評議会 (Armed Force Revolutionary Council: AFRC) 政権期 (1997年5月～1998年3月) におけるカマジョーの拡大に焦点を当てている。1997年5月、ポール・コロマによる軍事クーデターが起こり、カバー大統領はギニアに亡命した。コロマは AFRC 政権を樹立し、内戦を終結させるために RUF と連合政権を組み、カマジョーの解散を命じた。しかし、多くのカマジョーはカバー政権復帰を掲げて AFRC/RUF に抵抗した。リベリア国境付近の町ジェンデマに集結した各地のカマジョーは、西アフリカ諸国経済共同体監視団 (Economic Community of West African States Monitoring Group: ECOMOG)<sup>9</sup>の軍事支援を取り付け、組織の正当性を高めるためにノーマンを指導者として迎え入れた。ジェンデマ・カマジョーの司令官たちは、組織の名称を CDF と改め、リベリア人を戦闘員に組み入れた。一方、ノーマンは ECOMOG からの支援を手中におさめ、パトロンとしての地位を確

3 1985年から、シアカ・ステーブンス大統領に代わって、サイドゥ・モモ陸軍少将が後継者として政権を掌握していた。

4 1992年、バレンタイン・ストラッサーを中心とする下級将校が、クーデターによってモモから政権を奪い、国家暫定評議会 NPRC を打ち立てた。

5 第一次リベリア内戦 (1989～1996年) で戦闘を逃れシエラレオネに避難していたリベリア人難民。

6 1995年、NPRC 政権内部でのクーデターによりストラッサーは追放され、ナンバー・ツーのマーダ・ピオが国家元首となった。1996年、民政移管の選挙が行われ、テジャン・カバーが大統領に選出された。

7 リベリアで、チャールズ・テラーがサミュエル・ドウの独裁政権打倒を目指して結成した武装組織。1990年のドウ暗殺後、テラーはドウ政権派の民主統一解放運動 (United Liberation Movement of Liberia for Democracy: ULIMO) と武力衝突を繰り返したが、1993年に両者は一時的に和平合意した。テラーは、1997年の大統領選挙で圧勝し、大統領に就任した。RUF 指導者のサンコーはテラーの同胞である。

8 代理チーフは、パラマウント・チーフが戦闘などで死亡した後、後任にふさわしい人物がいない場合に代役として設けられる役職。

9 西アフリカ諸国経済共同体 (Economic Community of West African States: ECOWAS) が、内戦中のリベリアに派遣した平和維持軍。1997年のコロマによる軍事クーデターの際、数百名のナイジェリア軍が ECOMOG の一部としてシエラレオネに駐屯していた。

立すると、CDF の拠点をジェンデマの隣県のベース・ゼロに移し、メンデ以外の民族の自警組織を傘下に入れた。そして、ECOMOG やジェンデマ・カマジョーとともに多方面から AFRC/RUF に攻勢をかけた。1998 年 2 月、ECOMOG/CDF は、首都フリータウンを奪還し、同年 3 月、カバーが大統領に復帰した。

第 10 章では、後期カバー政権期誕生から内戦終結まで（1998 年 3 月～2002 年）の CDF による PC ネットワークの確立と内戦収束に伴うネットワーク解体までを追う。この時期、国軍が再編され、CDF は ECOMOG の指揮系統下に入った。中央では、ノーマンに近いベース・ゼロの CDF 司令官が幹部となり、農村部では、地方のカマジョーが行政事務所の人員として配置された。2000 年以降、和平プロセスが軌道に乗り、内戦が収束に向かうと、武装・動員解除および社会再統合（Disarmament, Demobilization and Reintegration: DDR）が進められ、CDF の戦闘員は次々と組織を離れた。リベリア人を含むジェンデマ・カマジョーの一部は、新たな資源獲得の機会を求め、リベリア民主和解連合（Liberian United for Reconciliation and Democracy: LURD）に参加し、第二次リベリア内戦を戦った<sup>10</sup>。一方、ノーマンは、DDR に反し CDF の戦闘員への軍事訓練を密かに続けていたが、2002 年に CDF の事務所が閉鎖され、2003 年にノーマンが逮捕されると CDF は解体した。

第 11 章では、数人のカマジョーのライフヒストリーから、彼らが異なる PC ネットワークを渡り歩く様子が描かれている。パトロンである司令官は、外部から得た資源を戦闘員に分配することが求められる。それ

ができないと戦闘員はある部隊を離れ、別の部隊に参加し、新たな資源を獲得しようとする。

終章では、カマジョー /CDF の統合と変容の過程から、カマジョー /CDF 全体とジェンデマ・カマジョーの PC ネットワークが分析される。前者は、各チーフダムのカマジョーが次第に統合され、AFRC 政権期にノーマンを頂点として確立する CDF の PC ネットワークであり、後者は CDF の一部でありながらノーマンとは独立して活動するカマジョーの PC ネットワークである。いずれもパトロンである司令官が資源をクライアントである戦闘員に適切に分配できるかどうか組織の規模や存続を決定付けると考察される。また、カマジョー /CDF の PC ネットワークはリベリアにも広がっており、このネットワークの解明は、一国の内戦が隣国の内戦を誘発する「紛争の連鎖」を理解する手掛かりを提供してくれる。

本書は、シエラレオネ内戦の主要な紛争アクターであるカマジョー /CDF を、私的な人脈を通じて構築される緩やかな統合体と捉えることで、アクター内部の権力闘争や離合集散、それに伴う組織の可塑性を実証的に示したと言える。1990 年代以降のアフリカの紛争では、集団として明確な外延を持たない民兵組織が軍事的に大きな役割を果たすことがあるが、本書はこうした民兵組織の流動性と暴力を考察するうえで参考になる。その一方、本書は、ほぼ全員が男性である自警組織の戦闘員を研究対象としており、PC ネットワークというタテの社会関係から内戦を生きる人々の生を描くことに終始している。そこで、最後になるが、地縁、親族、友人、恋人などを通じたヨコの社会関係に注目することで紛争の人類学において別の視点が生まれる可能性があるのではないかということを付記しておきたい。

（むらはし いさお）

10 テーラー政権打倒を目指し、セクー・コネが主導した反政府武装組織。第二次リベリア内戦（1999 年～2003 年）では、トマス・ニメリー 率いるリベリア民主運動（Movement for Democracy in Liberia: MODEL）とともに政府軍と交戦した。

佐藤靖明・村尾るみこ 編  
『衣食住からの発見』

(100万人のフィールドワーカーシリーズ第11巻)

古今書院、2014年、194ページ、2600円＋税



児玉由佳

アジア経済研究所

本書は、2014年に刊行を開始した「100万人のフィールドワーカーシリーズ」の第1回配本の2冊のうちの1冊である。第11巻ではあるが、「フィールドワークの雰囲気や醍醐味を明快につたえやすい」(p. 186)という编者たちの判断のもと、第1回目の配本になったという。本書では、フィールドワーカーたちの衣食住に関する試行錯誤を通して、調査地の人々の日常生活が豊かに描き出されている。また、多く掲載されている写真も読者の理解を助けてくれる。

本書は、4部9章で構成されている。取り上げられている地域は、アフリカがもっとも多いが、それだけではない。章順に、ペルー、エチオピア、ブルキナファソ、南極、タンザニア、タイ、ソロモン諸島などが扱われている。章間にある3つのコラム（ザンビア、ケニア、南極）もそれぞれ住・衣・食をテーマにしたもので、楽しく読める。

第Ⅰ部「信頼関係の構築」では、アマゾン（第1章）とエチオピア（第2章）の村で、村に溶け込もうとするフィールドワーカーたちが、人々と関係を結ぶために飲食を共にしようと試行錯誤している様子が描かれている。

第Ⅱ部「新たなテーマの開拓」では、エチオピアの牧畜民と生活を共にする中でフィールドワーカーが新たな視点を見つけ出していく過程が描かれ（第3章）、次にブルキナファソの町では自ら伝統的な服を仕立てるという経験から、女性たちが衣服を通して関係性を構築していることを発見していく（第4章）

第Ⅲ部「日常生活を支える工夫」では、まず、過酷で危険な環境にある南極を舞台に、研究活動を進めていくための細心の準備が紹介されている（第5章）。次にブルキナファソの半乾燥地であるサヘル地域の村で食事調査を行うことによってフィールドワーカーと住民との関係に生じるジレンマが描かれている（第6章）。続いて、タンザニアの国立公園のキャンプに寝泊まりしながら、現地のトラックと共にチンパンジーの調査を行った経験が綴られている（第7章）。

第Ⅳ部「調査生活で見出す世界のつながり」では、自分と調査対象者との関係についてのフィールドワークを通じた考察が綴られている。まず、タイ北部のカレン人難民キャンプでは、この章の筆者が調査対象の難民にお礼の食事を振る舞って拒否された経験を原点として、自分と調査対象との関係性やカレン人の文化や社会をひもといていく（第8章）。次に、ソロモン諸島の島では、「調査すること」と「生活すること」のバランスの難しさを実感しながらも、筆者が人々との対話を通じてこの二つの関係への理解を深めていく過程が描かれている（第9章）。

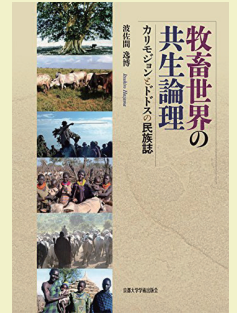
本書は、「100万人のフィールドワーカーシリーズ」という名にふさわしく、全世界に散らばって孤軍奮闘するフィールドワーカーたちの、論文ではでてこない苦労や日常生活の発見がちりばめられている。楽しくそして身につまされながら読み進めることができる本である

(こだま ゆか)

波佐間逸博 著  
『牧畜世界の共生論理  
—カリモジョンとドスの民族誌』

京都大学学術出版会、2015 年、312 ページ、4400 円＋税

白石壮一郎  
弘前大学人文社会科学部



本書は、ウガンダ北東部牧畜民の生業牧畜の枢軸である人間－家畜関係をめぐる民族誌であり、全章節項にわたってフィールドワークに依拠した記載とそこからの考察を徹底的におこなっているゆえの迫力と説得力に満ちた圧倒的な作品である。この紹介記事では題名にある「共生論理」について要約的に言及するにとどめる。なお、カリモジョンもドスも、それぞれ古典的な民族誌のある別々の民族集団として扱われてきたが、一定以上の同一性をもった社会・文化クラスタを形成しており、本書を通じて著者は「カリモジョン・ドス」として扱う（本稿では以下たんに「牧民」と記すこともある）。

西洋は牧畜を、人間が自然を統御しつつ利用し生産する技術知としてみる。そもそも家畜化（domestication）の定義こそは人間中心的なものとなっている、と著者は言う。こうした生産技術観に立って、アフリカ牧畜民の生業牧畜はもはや持続的に生産可能ではないとする「牧畜の終焉論」がある。これへの著者の対論は明確である。

「人にとって直接には摂取できない植物資源を、血や肉といった利用可能な形態に変換する山羊や牛の頭数が揃っている」というだけでは生業牧畜は成立しないという、いわずもがなの事実が認識の外に放り出されている。人間の側から対象である動物の資質を見て取って行為し、対象の側からの応答がなければ、つまり、人間が身振りを呈示し、特定のしかたで触れ、そしてときに声を上げて指示を出し、家畜が人間に近づいて乳を分泌し、移動方向や行動を修正するといったコミュニケーションなレベルでの感覚刺激を介した関係の技法がなくては牧畜は成り立たないのである。[p. 2]

本書がカリモジョン・ドスの生業牧畜にまつわる事象を綿密に記載していくのは、かれらの牧畜のあり方を生産のための自然統御の技術としてではなく、人と家畜との相互的な関わりのアートとして把握するためである。

家畜（牛・山羊・羊）の個体識別、各個体の系譜・履歴の共有、牧童の群への介入、牛の授受を通じた社会関係の結成と維持、去勢牛の呼び名と人名との重なり、去勢牛を詠う牧歌などのトピックについて、文化・社会的な装置として描き出した民族誌は枚挙にいとまがない。著者がしめすデータと事例からわれわれは、それら牧民の営みひとつひとつのあり方の微細な襞と必然とを従来のどの民族誌よりも生き生きとした形で了解でき、かれらの人間－家畜観の全体のなかに布置したうえで「分かった」という感を得ることができる。牧民は、離乳を果たすわずか2歳前後で、体重2kg前後の子山羊や子羊を両腕で抱え、歩いて家畜囲いのなかに連れて行く役割を担う。これがデビューで、以降かれらは家畜のケアに終生参与する [p. 111]。個々の家畜の一生と個々人の一生とがかかわり合い、重なり合うあり方。個々人の人生の節目には牛や山羊の個体の生が刻印されている一方で、家畜の側にとっても小さなころから育てられることによって、人間とともにある居留地の囲いは広大な放牧地とは異質な親密圏となっているのであり、異種混浴的な社会性獲得の場と見なしうるのである [p. 247]。

たとえば、牧童の特定の牛に対する名前の呼びかけに対して、呼ばれた個体は周囲の個体が反応しない中で正確に応答を示すことが、牧童の「名前呼びテスト」調査によって明らかにされる（3章2節内「個体名とコミュニケーション」）。男性は（審美的に）お気に入り

りの体色をもつ個体にちなんだ「去勢牛の名前」を持っている。同じ去勢牛の名前をもつ者どうしても多いが、同名の者どうしは特段の関係にあるわけではない。だとすれば、この名は個人特定の機能も社会関係の表現機能も負っていない。あくまで最愛の家畜体色・模様を表明するところに力点がある（2章2節内「家畜の名前と人の名前」）。各々の牧童の吟じる牧歌は「作る」ものではなく「想起する」もしくは「おとずれる」ものであり、10歳前後の牧童からおとなまで、家畜の個体名を詞に加えたものが繰り返しその個人によって口ずさまれる。収集された745曲の牧歌では、10歳台の牧童の歌には「放牧」が、30歳台以上の男性の歌には「家畜の所有」が高い割合でトピックとして歌い込

まれている（4章3節）。

個々人と山羊・羊・牛の各個体とはともに存在し合うことによって一生を過ごす。「顔」をもつ個別的な他者に徹底的に寄り添う」というかれらの営為は、「ある特定の類的な集合を示差特徴に応じて階層的にカテゴライズする」近代西洋のメンタリティとは根源的に異質なのだ [pp. 11-12]。本書に著者が言う「共生論理」とは、カリモジョン・ドスの牧畜社会が生活経験のなかで独自に洗練させてきた、ヒト-動物間のトランススピーシーズな関係を基礎づける実践論理の総体なのである。

（しらいし そういちろう）

## 会員の異動

### ■ 入会者

| 氏名    | 入会年    | 所属                         |
|-------|--------|----------------------------|
| 島津 侑希 | 2015 年 | 名古屋大学大学院国際開発研究科            |
| 榎野 愛  | 2015 年 | 株式会社三祐コンサルティング海外事業本部技術 1 部 |
| 島津 英世 | 2015 年 | 合同会社環境と開発研究所               |
| 森口 岳  | 2015 年 | 東洋大学国際地域学部                 |
| 大門 碧  | 2015 年 | 京都大学アフリカ地域研究資料センター         |
| 江端 希之 | 2016 年 | 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科     |

### ■ 退会者

| 氏名               | 退会年    |
|------------------|--------|
| 大城 道則            | 2014 年 |
| 佐々波 秀彦           | 2014 年 |
| 嶋田 雅暁            | 2014 年 |
| 萩生田 憲昭           | 2014 年 |
| ジョン エドワード フィリップス | 2015 年 |
| レダ アクリルハブトゥ      | 2015 年 |
| 菊池 忠純            | 2015 年 |
| 大岩 隆明            | 2015 年 |
| 仲谷 英夫            | 2015 年 |
| 屋形 禎亮            | 2015 年 |
| 伊藤 義将            | 2015 年 |